

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター

## 多言語・多文化 教育研究

Multilingual Multicultural Education and Research

URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>

特集

多言語・多文化社会を学び、実践する  
外大生による地域社会への貢献

外国につながる子どもに日本語や教科の学習支援を行う

多言語・多文化教育研究センターは、2006年4月に開設されてから今年で5年目を迎えます。本センターは、教育・研究・社会連携の3分野での活動を展開していますが、そのうち教育活動にあたる、“多文化コミュニティ教育支援室”と“Add-on Program「多言語・多文化社会」”では、以前から本学においてその先駆けとなる活動が展開されていました。

多文化コミュニティ教育支援室は、学生たちが本学で学んだ世界各地の言語・文化に関する知識を活かしてボランティア活動を行うことで多言語・多文化化する地域社会に貢献し、そうした活動を通じて自らを成長させていくことを支援するために設立されたという経緯があります。当初は、学生たちが始めたボランティア活動をきっかけとして、2004年10月に文部科学省「現代的教育ニ

## No.15

2010（平成22）年4月

## CONTENTS

- P.2…〔特集〕多文化コミュニティ教育支援室
- P.5…〔社会連携〕「つなぐ」シンポジウム開催
- P.6…〔研究〕連載9 世界の多言語・多文化 チェコ
- P.7…〔研究〕「世界の多言語・多文化社会研究」シンポジウム開催
- P.8…〔教育〕Add-on Program 修了証授与  
〔社会連携〕多言語・多文化専門人材養成講座

ズ取組支援プログラム（現代GP）」として発足、現代GPとしての活動が終了した2007年度から本センターの一部門となり、現在はスタッフ5名と担当教員1名で、学生のボランティア活動をサポートしています。主な活動として、外国につながる子どもたちへの日本語・学習支援と地域の小・中・高校における国際理解教育のプログラムづくりの2つがありますが、学生自らが主体となって企画・運営する活動も年々増えてきています。

Add-on Program「多言語・多文化社会」は、2005年に本学で実施された「多言語多文化共生学講座」



多文化コミュニティ教育支援室（研究講義棟 206号室）



外語祭で多文化共生を問いかける劇を自作上演した  
多文化コミュニティ支援室有志の学生たち(2009年)

の内容をより発展させた正規の授業として、2006年4月にスタートしました。多言語・多文化化する日本社会のいまを多面的に学ぶ教育プログラムとなっており、「社会論入門」「言語技能入門」「歴史と現在」「政策と法」「社会・文化」「言語とコミュニケーション」「実習」「わたしの多言語・多文化社会論(プレゼンテーション)」といった多岐にわたる内容で、2008年10月にはすべての授業科目が開講されました。Add-on Programの大きな特長のひとつは、各科目担当教員と本センターを運営する教職員とが運営チーム会議をつくり、授業の内容・方法やゲスト講師などについて検討をしながら、より充実したプログラムへと改善を重ねていることです。2010年3月には全10科目の単位を取得した初の修了生が誕生しました。

近年では、多文化コミュニティ教育支援室でボランティア活動を行いながら、Add-on Programの授業を履修する学生の数も増加しており、授業で学んだ理論や知識と、現場での経験を相互に捉えかえすことで、多言語・多文化社会にかかわる総合的な学びが実現しつつあります。本特集では、支援室の個々の具体的な活動を通じて

何を学び、考えたのか、また、そこからどんな課題や展望を描いているのか、学生たちの「声」を届けます。

## 子どもたちのための場づくり

日本語・学習支援の活動をする大前希望<sup>のぞみ</sup>さん(ビルマ語専攻3年)は、外大に入学した数ヵ月後に「ボランティア入門講座」に参加したのがきっかけで、支援室の活動に積極的に関わるようになりました。現在は、「府中国際交流サロン」(以下、府中サロン)における児童学習支援のコーディネーターを務めています。この府中サロンではさまざまな活動が府中市(東京都)の委託事業として行われていますが、外大生はそのうちの外国につながる子どもたちへの日本語・学習支援の場を任されています。

学生たちは、府中サロンが、日本語や学校の勉強をする場であると同時に、「子どもたちの居場所」や「子どもたちの出会いを広げる場」でもあると考えています。そのために大前さん自身は、「笑顔で楽しく」、「間違いをすぐに否定しない」、「子どもたちが自分のルーツを感じるきっかけをつくる」ことをいつも心がけています。しかしながら、活動を通じての悩みも尽きません。

特に、大学のAdd-on Programの授業で学んだ理論や知識と、実際に子どもたちに接したときにつきつけられる現実との狭間でどのように折り合いをつけたらよいか難しいといえます。「現場で子どもたちの状況やその周囲の環境など困難に直面すると、自分自身がいっぱいになってしまうこともあります。頭で理解していた概念を課題として問うこともできないまま、理論を現場に落とし込ませることって難しいなあ実感しています」。

府中サロンに関わる学生たちは、お互いの意見を共有したり、家庭ぐるみで子どもたちのことを考える定期的な保護者会を開催したり、さらに活動を次に伝えていくため学生コーディネーターの育成など、活動全般にわたって取り組まなければならない課題も数多くあります。



オープンキャンパスでプレゼンテーションをする大前さん

## 自分に疑問を投げかける

そうしたなかで、大前さんが改めて学んだのは、相手と向き合うことの大切さです。無意識のうちに「学生」「教える側」という立場に立って、子どもとの間に一線を引いてしまっていたか。相手と向き合うためにはまず自分自身に向き合うこと、つまり、常に自分に疑問を投げかけ、そのなかから見えてきた自分の持っている面を、嫌なところも含めて、否定せず認めることだと気づいたそうです。「そのプロセスは、とてもしんどくて、嫌になることもあります。同時に自分が豊かになれる貴重な機会だとも思います」と語る大前さんは、人に奉仕するだけではない、自分のための「ボランティア」があっても良いのではないかと、そのイメージを大きく捉えなおしているようです。

## コミュニケーションの大切さ

国際理解教育に関わる佐々木<sup>ふうと</sup>風人さん（ドイツ語専攻2年）は、かつては自分が支援室の活動に関わることになろうとは予想もしなかったそうですが、気の合う友人との出会いをきっかけに、1年生の後半から本格的に参加するようになりました。これまでの約半年間で、中学校での授業の実践と、「高校生のための国際理解セミナー」の運営を経験しました。

中学校での実践に際しては、外国から来た生徒と日本人生徒との関係がうまくいっていない状況の改善に関する依頼を受け、学生たちは手探りで授業案の作成に取り組みました。外大生の強みである語学力を生かして、外国から来た生徒が普段感じているような言葉の壁を疑似体験するという仕掛けをつくり、そのうえで、「言語より先にコミュニケーションが存在すること」、「それを乗り越えてコミュニケーションをとろうとすることの大切さ」を中学生たちに実感してもらうことを目指しました。

また、全国から高校生の参加を募って実施されるワークショップ「高校生のための国際理解セミナー」では、



調布市立調布中で国際理解教育授業を行う佐々木さん

外大生がプログラムづくりや当日の運営に携わり、高校生とゲスト講師との仲介役を果たしています。佐々木さんは、講義のなかで、高校生と一緒に学びながら自分自身も大きな衝撃を受け、セミナー終了後もいろいろと考えるきっかけになったと言います。

こうした活動のなかで学んだこととして佐々木さんもまた「相手と向き合うことの大切さ」を挙げました。「よく言われることだし、言葉の上では理解していたと思いますが、プログラム案を作ったり、ディスカッションしたりする中でいろんな人のいろんな考えに触れ、中身を伴ったその大切さを理解できたように感じます」。

## 自分を突き崩したい

さらに、「活動を行う中であらゆる考えに触れるたびに、自分の考えが変わっていきました。そのたびに、自分が壊れていくような感じに襲われたんです。例えば、尹<sup>ゆんへい</sup>慧瑛先生（多言語・多文化教育研究センター准教授）の講義を聞いているうちに、自分の考えが崩れていって、そのことですごく痛みを感じました。けれども、考えていくにつれて、先生の話の踏まえた上で自分の意見が出てきた。そういう意味では、僕はいま、成長の途中にあると思います」と語る佐々木さんは、これからも、いろいろな人の考えにどんどん触れて、自分自身を突き崩しながら、成長していきたいということでした。

### Add-on Program 「多言語・多文化」開講科目一覧

部 門	授業科目名	修了に必要な最低単位数	部 門	授業科目名	修了に必要な最低単位数
基礎部門	社会論入門Ⅰ(1学期)	2単位	言語技能部門	言語技能入門Ⅰ(1学期)	2単位
	社会論入門Ⅱ(2学期)	2単位		言語技能入門Ⅱ(2学期)	2単位
理論部門	歴史と現在(1学期)	2単位	実習部門	実習Ⅰ(1学期)	2単位
	社会・文化(1学期)	2単位		実習Ⅱ(2学期)	
	政策と法(2学期)	2単位	プレゼンテーション部門	わたしの多言語・多文化社会論「プレゼンテーション」(2学期)	2単位
	言語とコミュニケーション(2学期)	2単位			

合計 20 単位

支援室での活動の実質と学生の学びは、当然のことながら年々変化しています。支援室の体制が充分に整っていなかった頃から活動に参加してきた田村かすみさん

(スペイン語専攻4年)が自身の視点から、これまでの成果と課題をふまえて次のように語っています。

### これまでの支援室の活動をふりかえって

学生たちは、「現場」の声を聞き、そこに生きる1人ひとりを知っているからこそ、学問が持っている一般化してしまうことの暴力性に自覚的です。また、現場での個々のケースを知っているからこそ、それらを一般化して展開することで問題を解決へと向かわせることのできる「理論」の力を実感してもいます。このような視点は、「理論」と「現場」を相対化する機会があって初めて生まれるものであるため、学生たちに現場での活動を提供する多文化コミュニティ教育支援室の果たす役割は大きいのではないかと考えています。学生たちは、幾度も自己を解体する経験を繰り返しながら、批判的に考える主体へと変わっていきます。それは、アカデミックな理論の世界から見れば、生ぬるい批判的思考力かもしれないけれど、重要なのは、それぞれの学生がそれぞれにこの批判的思考力を自分のものとするのではないかと思います。

今後の課題としては、「自分」と「相手」だけでなく、多言語・多文化化が進む社会全般とどのように向き合っていくかがあると考えています。私たちが行っているような取り組みの重要性を、どのように社会に訴えていくことができるのか、私たちと同じような活動を行っているNGOやNPOが、どれほどの厳しさを抱えながら存在しているのかも知りたいと思っています。最近、支



外大生が作った「国際理解のためのゲーム」を体験する高校生たち

援室に関わっている学生のあいだで勉強会を始めました。これは、スタッフから提案を受けたわけではなく、自分たちが必要性を感じて行うようになったものです。こんなふうに、私たち学生が、自ら必要なものを考え、企画し、実行する力をつけていくことが今後の課題のひとつに挙げられます。批判的な思考力というものを身につけつつあるとしたら、次はそれを踏まえた上で何をやるのが問われてくるのではないかと思います。

(田村かすみ スペイン語専攻4年)

日本社会の多言語・多文化化が進行するなか、多文化コミュニティ教育支援室に対する社会的ニーズはますます高まってきていますが、これらの活動は、本学による社会連携や地域貢献であると同時に、外大生ならではの学びと経験の場を提供するまたとない教育活動にもなっ

ています。学生たちが与えられた枠を超えて、主体的に問いを発見し深めていくきっかけをどのように大事にしていけるのか。このことは大学のあり方が変化を迫られている昨今、大学全体にとっても大きな課題であると言えるでしょう。

### 在日外国人児童のための教材開発

本センターが、増加する在住外国人児童のために作成している教材に、スペイン語に対応した「南米スペイン語圏出身児童のための教材」が加わりました。ポルトガル語に対応した「在日ブラジル人児童のための教材」、タガログ(フィリピン)語に対応した「在日フィリピン人児童のための教材」とあわせてご活用ください。

詳細は、ウェブサイトの「トップページ」→「在日外国人児童のための教材」をクリック!



東京学芸大学・東京外国語大学共催 「つなぐ」シンポジウム-第2回-

「多文化社会における学び・自立・参加  
～『つなぐ』人とその役割-教室、家庭、地域から-」

東京学芸大学国際教育センターと本学多言語・多文化教育研究センターは、互いの特色、主要な活動分野を共に生かしながら、両センターの共通の課題である多文化社会における教育研究および実践の現場に生起する課題解決に寄与することを目的に、「共同シンポジウム」を2008年度から開催しています。多様な分野、組織、人々が参加し、シンポジウムをとおしてつながっていくことができるようにとの思いを込めて、「つなぐ」が、共同シンポジウムを貫くテーマとなっています。

第2回目となる今回の「つなぐ」シンポジウムには、本センターで開講している「多文化社会コーディネーター養成講座」の受講者、学校教員、大学関係者、国際交流協会職員、企業、行政、市民団体など多様な分野・組織から78人が参加、熱い議論が交わされました。

シンポジウムは、グループごとに参加者同士で自己紹介と自身の実践において現在最も課題と感じていることを話しあうセッションからスタートし、「どうやったらいろいろな人を巻き込んでいけるのか」「大学の学生と地域をどうつなげていくか」「学校教育における外国につながる子どもの日本語教育と日本語以外の問題とをどうつなげ、高校進学後の指導にどうつなげたらいいのか」



などの課題が提起され、参加者の「つなぐ」視点での課題認識がうかがわれました。続いての話題提供のセッションで、参加者は課題を解決するヒントを探れるように準備された「コメントメモ」用紙に参考になった点をメモしながら3人の発表を聴きました。



佐藤郡衛さん  
(東京学芸大学国際教育センター教授)

保見団地で学習支援活動を行っている深見麻衣さんは、「外の組織・人々とつながるためには自らの組織のスタッフ間のつながりが大切」、児童福祉司の田中良幸さんは、「日本人の発想での支援では多文化社会の問題は見えない。限界を知り、異なる専門分野をつなぎ、足りない所を創造していくコーディネーター機能が重要」と語り、また幕田順子さんからは、組織自体がコーディネーターとしての役割を持つ国際交流協会での実践が紹介されました。

グループごとに、コメントメモを活用しながら意見交換が行われた後、佐藤郡衛さんから、まとめとして「つなぐ人とその役割」について次のようなお話がありました。

「つなぐ人は、情報の共有化や課題を掘り起こし協働できる場を作るための方法論(仕掛け)を持っていないといけない。つまり、学びをどう組織化していくか、参加者どうしをつなぐプログラムを作れるか、外の力をかりながら組織を容容させたり創造していく力量が求められる。また、学校の教員については、省察的实践者として、子どもと教材を結びつける力、子ども同士を結びつける力、社会と子どもを結びつける力が専門性として求められる」

今回は、会場を東京学芸大学に移して開催します(2011年2月予定)。引き続き、多くの方々の参加をお待ちしています。

● 「つなぐ」シンポジウム-第2回- 当日のプログラム

日時 : 2月13日(土) 13:00 - 17:00  
場所 : 東京外国語大学 研究講義棟 113 教室  
参加者数 : 78人

- ①開会挨拶  
北脇保之 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター長  
加藤祐司 東京学芸大学国際教育センター長
- ②グループワーク  
自己紹介とテーマの導入
- ③全体共有

- ④趣旨説明  
青山亨(多言語・多文化教育研究センター副センター長)
- ⑤多文化社会における『つなぐ』人とその役割  
- 教室、家庭、地域から(話題提供)  
◎学校と地域をつなぐNPOの実践~保見団地の活動を事例に  
深見麻衣(豊田市教育委員会学校教育課通訳・多文化社会コーディネーター養成講座2期生)  
◎児童相談所から多文化家族の支援を考える~ソーシャルワークの視点から~  
田中良幸(東京都杉並児童相談所児童福祉司・多文化社会コーディネーター養成講座2期生)  
◎教員と地域をつなぐ国際交流協会の実践  
幕田順子((財)福島県国際交流協会・主査)
- ⑥グループ別意見交換

## 連載 9

## 世界の多言語・多文化

## チェコ

篠原 琢 (大学院総合国際学研究院 教授)

かつての東ヨーロッパには、「アジア」を冠した独特の店がある。統一されて20年たったドイツでも、それは旧DDR(東ドイツ)地域にしかない。東ドイツで目立つのは「アジア＝タイ料理店」、ポーランドのどの町にもあるのが「中国＝アジア料理店」、チェコにあるのは「アジア・マーケット」。ポーランドの「中国＝アジア料理」はだいたいどこでもメニューは同じだが、装飾に使われた漢字が鏡文字になっているところから、働いている人が中国人でないの是一目瞭然だ。チェコで新鮮な野菜を手に入れようと思ったら、「アジア・マーケット」という名の八百屋に行かなければならない。そして旧東欧のどこでも、安くて良質の衣類が欲しかったら、アジア・バザールに行かなければならない。実はそのどれもが、ベトナム人コミュニティがホスト社会を相手に展開する商売である。



ベトナム人の経営する小商店は、夜も休日も営業していて、プラハの日常生活には欠かせない (左:筆者)

社会主義時代、旧東欧の相対的な先進国は数多くのベトナム人労働者や学生たちを迎え入れていた。学生を別にすれば、この人たちはたいてい、郊外、あるいは工場近くの寮で集団生活をしていて、彼らの姿を町で目にするのはまれだった。隔離といってもいいだろう。人々はさまざまな噂を流した。いわく、ベトナム人は米ドル建てでよい給料をもらっている、いわく、彼らはベトナム戦争の戦費を労働で返しにきたんだ、などなど。体制転換の後、東欧各国は「共産主義の負の遺産」とばかりに、ベトナム人を追い出しにかかった。旧DDRが極端な例だったが、90年代前半はこの人たちに対する人種主義的暴力が日常茶飯事であった。私のプラハ留学中、日本大使館から「ベトナム人に間違われぬようにきちんとした服装で外

出しましょう」という注意書きが回ってきたのには、呆れるばかりだった。空港にはたくさんの消費財を買い込んで帰国するベトナム人たちがあふれていた。

それから10年ばかり経つうちに様子は変わり始める。社会主義時代から残った人々がよすがになって、次々と新移民／出稼ぎの人々がやってきたのだ。彼らはバザールでの屋台のような店から始めて、上に述べたような小さな店舗を経営するようになった。ここに働く人たちは、商品とともに旧東欧を回遊していた。それは旧東欧の消費生活に欠かすことのできない風景の一部となった。しかし、奇妙な抑揚をつけて破格のことばで愛想を言う店員しか知らないホスト社会の人々にとって、移民コミュニティはいくらか謎めいたものでしかなかった。

さらにそれから10年、ベトナム人コミュニティでは、生活する場所で教育を受け、生活地のことばを第一言語として、チェコ人として、ポーランド人として高等教育を受け、仕事に就く世代が現れ始めた。その人たちの多くは、移民コミュニティとホスト社会を結ぶような仕事(弁護士や司法書士は不可欠だ)に携わっている。

そんななか、昨年、チェコでは Lan Pham

Thi という女の子が書いた『白い馬、黄色い竜』という小説がベストセラーになった。この小説には、ベトナム人の家族に生まれ、チェコ人として育った女の子が、チェコ語の習得に格闘しながら学校に通い(これはチェコ人なら誰でも学校で経験することである)、陰に陽に繰り返される差別や好奇の目を経験しながら、自分の位置を確認しようとする物語が、「十代の目で」描かれている。著者はいくつかの言語を習得して、いまはクアラルンプルの大学で「環境マネジメントと情報工学」を学んでいるという。人々の日常的な体験からして、「ベトナム系チェコ語作家」の登場は当然のことであつたし、待たれていたものでもあつた。それが若く美しい女性(本の裏扉には著者の写真がある)であつてみれば、まったく願ったりである。

ところが、編集者も含めて、実際に著者に会った者は誰もいないというのだ。原稿の受け渡しも、メディアのインタビューも、すべてのやり取りはメールで行われた。著者のような女の子は実在しないのではないかと、本当の書き手は文体からして「成功に恵まれなかった50歳前後の(チェコ人)男性ジャーナリスト」などという憶測まで飛び交い始めた。その真偽は別として、移民コミュニティの人々とどのように付き合ったらいいのか悩んでいたチェコ社会が、このような発

信者を必要としていたのは確かだろう。この一件からは、「ヴェトナム人」をめぐって人種的、ジェンダー的、文化的、社会・経済的な、さまざまな磁場が働いていることがうかがえる。それでも、旧東欧の人たちは、「彼ら」と付き合いたいし、付き合わなければならない。伝統的には移民送り出し地域で、文化的背景や顔貌の異なった同胞市民に慣れていない旧東欧諸地域は、新しい多文化主義の挑戦をどのように受け止めるのか、まだ模索しているところなのである。

## 第2回「世界の多言語・多文化社会研究」シンポジウム開催

多言語・多文化教育研究センター主催の「世界の多言語・多文化社会研究」シンポジウムが、2010年2月22日に本学で開催された。第2回目となる今回は、「ゆらぐ境界、交わる人びと：『日本人』を再考する」と題し、多言語・多文化化が進行する現場の課題をふまえながら、「日本人」概念が変容を迫られている現状について議論をおこなった。会場には158人の参加があり、昨年に続いてテーマへの関心の高さをうかがわせた。

まず冒頭にスティーブン・マーフィ重松氏(スタンフォード大学)による基調講演があり、アメリカ人の父と日本人の母の間に生まれた「アメラジアン」としてのアイデンティティについて、家族の歴史を紐解きながら、さまざまな思いが語られた。続いてオーストラリアを拠点とする森楽博氏(作家)とマーフィ重松



氏との対談では、両氏の体験的思想を通じて「ハーフ/ダブル」「アイデンティティ」「寛容」といった言葉をめぐりやりとりがされ、フロアからも多くの質問・コメントが寄せられた。

午後の研究報告セッションでは、本センターフェローら3人が登壇した。武田里子氏が結婚移住女性を通じて見た「多文化家族」の可能性について、藤田美佳氏が母親の再婚によって来日した子どもの国籍取得とアイデンティティについて論じるなかで、日本社会の多言語・多文化化のリアリティ



森楽博氏(左)とスティーブン・マーフィ重松氏(右)の対談

から「日本人」概念再考の論点を提出したのに対し、金戸幸子氏は近年増加をみせている台湾在住日本人のシティズンシップ獲得をめぐる状況を通じて、日本国内の現状のみならず、海外に越境していった人びとを含み込んだ「日本人」概念の再考の必要性を唱えた。

これらの議論を引き継ぎながら、シンポジウムの最後では本学教員を中心とした全体討論を行った。岩崎稔氏、北脇保之氏、藤井毅氏、尹慧瑛氏からは、それぞれの専門分野、立場、経験をふまえたコメントが述べられ、多言語・多文化状況のリアリティから課題を共有し、実践と思考

の場をつなげていく必要性が改めて確認された。(内容については本センターのHPに掲載しています。ご参照ください)。



## ((教育))

# Add-on Program 初の修了生が誕生

多言語・多文化教育研究センターが2006年度より開講してきたAdd-on Program「多言語・多文化社会」の初めての修了生が、この3月に誕生しました。修了生は、太田里沙さん(中国語専攻)と松田陽子さん(ポルトガル語専攻)の2人です。最終科目の「わたしの多言語・多文化社会論」で、太田さんは観光政策の推進による「開かれた日本」への提言を、松田さんはインドネシアからの看護師・介護福祉士候補者の受入制度の現状と課題を、それぞれプレゼンテーションとしてまとめあげ、Add-on Programの全課程を修了しました。



藤井学部長から修了証を授与される太田さん

「授業では、インプットとアウトプットを同時に行う機会が多く、何か自分でテーマを決めると

いうときに大いに役立った」(松田さん)、「外大生として、言語だけではなく日本の多言語・多文化状況についても知っておくべきだと思った」(太田さん)というように、Add-on Programが、授業への主体的な参加を促しつつ外大ならではのコンテンツを提供している授業プログラムであることが、2人にとって大きな刺激になったということです。

また、この春社会人となった太田さんは「大学生活の4年間を通じて1つのテーマを掘り下げてみたかった。就職活動中の面接で『継続力』をアピールする際に、アルバイトを挙げる学生が多いなか、学生の本分に真摯に取り組んでいるということで高い評価をいただいた」というエピソードも語ってくれました。去る3月19日には、Add-on Program修了証の授与式が本学学部長室でおこなわれ、関係者参列のなか、太田さんは、藤井守男学部長より修了証を授与されました。

このAdd-on Programは、2010年度も開講されます(P.3参照)。新入生の皆さんもぜひ修了証取得に向けてチャレンジしてみてください。

## 社会連携

### 多言語・多文化社会専門人材養成講座 - オープンアカデミーで開講

詳細については、本センターウェブサイトをご覧ください。

多言語・多文化が進む現代の日本社会は、言語・文化の違いによって起こる、子どもの教育、外国人労働者の雇用などさまざまな問題に直面しています。各自治体でも外国人住民むけに相談窓口を設置するなど対策に乗り出していますが、十分な対応をするためには改善すべき点が多いという現状があります。このような課題を解決できる人材としてのコーディネーターやコミュニティ通訳の養成は急務であり、経済界や教育界、行政においてもその必要性が強く提起されています。

こうした社会の要請に応えるため東京外国語大学オープンアカデミーでは、本年度より「多言語・多文化社会専門人材養成講座」で、

- ①「多文化社会コーディネーターコース」と
- ②「コミュニティ通訳コース」の2コースを開講します。

開講期間：①2010年8月27日(金)～11年2月21日(月) 全9日間  
②2010年8月27日(金)～9月25日(土) 全7日間  
会場：東京外国語大学 府中キャンパス

【主催】東京外国語大学 社会連携事業室

【企画・運営・問合せ】

多言語・多文化教育研究センター

TEL：042-330-5455 FAX：042-330-5448

E-mail：koza@tufs.ac.jp

### 多言語・多文化教育研究センターの刊行物

別冊1 多文化社会に求められる人材とは？  
「多文化社会コーディネーター養成プログラム」  
～その専門性と力量養成の取り組み～

別冊2 外国人相談事業  
～実践のノウハウとその担い手～  
～連携・協働・ネットワークづくり～

別冊3 多文化社会コーディネーター **新刊**  
専門性と社会的役割  
～「多文化社会コーディネーター養成プログラム」の取り組みから～



◎ご希望の方は、ウェブサイト(トップページ→センターの発行物)をご参照の上、お申込みください。

発行 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター  
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟319号室

Tel 042-330-5441 Fax 042-330-5448  
E-mail tc@tufs.ac.jp  
URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer>